
魔法使いローズと吸血鬼

まろにー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いローズと吸血鬼

【Nコード】

N6991C

【作者名】

まろにー

【あらすじ】

魔法使いローズは、ある日キャベツに包まれた自分そっくりの赤ん坊を精霊から手渡される夢を見た。「大事に守ってね」と言つて精霊は消えたが、その翌日からローズは何者かに命を追われるようになる。

プロローグ

とある世界のとある時代、はるか西の彼方にある魔法の国で……。

小さな寝台の周りには、嗚咽やすすり泣く声が集まっていた。

寝台に横たわる老女にはもはや瞼をあげる力も残っていなかった。

太陽が星に喰われ闇に包まれたこの日、人間、精霊、魔族――ありとあらゆる種族が彼らの希望との別れを惜しんでいた。

「……約束しましょう。たとえどのような姿になろうと、私は何度もこの国に生まれ変わります。そしてあなた方をあの邪悪な神からずっと守り続けましょう。だからみんな、どうか泣かないで。私たちが離ればなれになるのはほんの少しの間だけなのですから」
そう自らが率いてきた民を、老女はかすれ切った声で子供をあやすように慰めた。

誇り高く優しい魔女はこれまで誰にも一度も嘘をつくことはなかった。

だから彼女がまた会えるというならきつとそうなのだろうが、しかし、それでもその場にいた者たちの悲しみはとうとう晴れることはなかった。ある者は徐々にぬくもりをなくしていく身体にすがり、ある者はわき上がる苛立ちをこらえきれずその場から立ち去ったという。

それからほどなくして、一国を建国した偉大なる魔女は人間の身体
の限界に息を引き取らざるをえなかった。

その後干からびた体から離れた気高い魂は、水の精霊ジブリールによって然るべき女性の元へ秘密裏に運ばれた。

こうして終わりを知らない輪廻の儀式は始まったのである。

プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

第一章（１）

丸い太陽が、床に落ちた熟したトマトのようになった夕暮れどき。ローズが店のカウンターでうとうとしていると、チャリンとドアベルが鳴った。

「はい、いらっしやいませ」

客が入ってきたのがわかって、ローズは慌てて垂れていたよだれをぬぐって椅子から立ち上がった。

今年の春魔法学校を卒業した魔法使い見習いのローズは現在、三賢者の一人レオナルド・メルキオールが主催する魔法ショップに住み込みで働いている。

ごく普通の魔法ショップでは主に薬や香辛料、お守りなどが売られているが、レオナルドの魔法ショップでは美容によいとされる食品や化粧品も販売している。そのせいか、毎日貴族から主婦まで多くの女性客が、王都の大通りに面したこの店に立ち寄る。

今来た客も若い女性だ。

客は昼飯時から昼過ぎにかけてもっとも多いが、彼女のように閉店間際になってくるのは珍しい。

若い女性客は、水色がかった長い銀髪に透き通るような青い目をしていて、まるで精巧な人形のような顔立ちだ。すらりとした体に名のしれた魔法使いが着ているような滑らかな光沢を放つ白い長い口ブをまといっている。

きわめて身分が高そうだが、このあたりでは見かけない顔だ。

買い物帰りなのか、女性客はとてつもなく大きなキャベツを腕に抱えながら珍しげにきよきよと茜色がかった店内を見回していた。「いらっしやいませ。何をお探でしょうか？」

ローズはにこっとして客に話しかけた。

レオナルドの魔法ショップでは、工房に入っただけのばかりの新前はまずカウンターでの接客や店内の掃除をさせられるのが決まりだ。要す

るに雑用係で、ローズのような駆け出しの魔法使いが店の裏にある工房で薬を練ったり、調理をさせてもらうまであと二年ほどかかる。女性客はローズの言葉に一瞬きよとしたが、ああと小さく何か納得したようだ。

「わたしここへ買い物にきたわけじゃないの」

女はつつけんどんとした口調で答えた。かなり高圧的な物言いだ。それも慣れた感じが伝わってくる。ローズは一瞬眉を寄せたがかうじて笑顔を保った。

よほどのことがない限り、少しでも客に粗相があるとわかるとこの工房では即刻破門されてしまうのだ。先月も髑髏クツキーを万引きしない・したで客ともめた同僚が無理やりやめさせられた。

見習いは一度破門されると、違う工房でまたいちからやり直さねばならない。しかし一度破門処分された見習いを雇う工房はそうそう見つからない。それでは正式な魔法使いになるのに時間がかかるので、客がどんなにいけすかなくてもローズはなるべく問題を起こさないように振舞っている。

ローズはふたたび若い女性客に丁寧に尋ねた。

「ではどのようなご用件でしょうか」

「ここにローズ・スミスという人がいる？」

「それは私ですが……何の御用でしょうか」

ローズは戸惑いながら答えた。

どうして見ず知らずの人間がわたしの名前を知っているんだろう。ローズは相手の態度もあいまってえたいのしれない不気味さを覚えた。

女はふーん、と冷たい視線で値踏みするようにカウンター越しにローズを見下ろしてきた。

なんだか学者か錬金術師が研究対象を観察しているみたいだ。

何よ、失礼ねとローズは思ったが表情には出さなかった。それが半年ここで働いた成果だ。

ローズはおとなしくぶしつけな視線に耐えた。

「うーん、予想していたよりあまり胸がないわね。腰も細そうだし、生育不良って感じ。ま、仕方ないわね。あの人が選んだんだから」

「な！」

女はしばらく無機質な青い目でじろじろ見つめた拳句、さらっと失礼なことを言い放った。

日ごろ気にしていることを無遠慮に指摘されて、ローズはとうとうキレそうになった。

「なんなの、あなた。いくら客でも言っていないことと悪いことが……ぐはっ」

ローズはのけぞった。最後まで言い終える前にいきなり胸にキャベツを押し付けられたのだ。

「何するんですか、いきなり。いつとくけど野菜の押し売りはウチではうけつけませんから」

ローズは反射的にキャベツを抱きかかえたが、すぐに女に抗議した。ここまで侮辱されて黙ってはいられない。

すると女は不思議そうに首をかしげた。どうしてローズが怒っているのかわからないようだ。

「ヤサイノオシウリ？ なあにそれ？ わたしはその子に頼まれただけよ。あなたの元に送り届けてほしいって」

女は白い指でキャベツを指した。

その子？

視線を腕の中におろすと、なんとキャベツの中には赤ん坊がうまっていた！

否、赤ん坊がキャベツの葉でくるまれていた。

金色の髪をした赤ん坊は、すやすやと心地よさそうに眠っている。

あまりの予想外の出来事にローズは完璧に固まってしまった。

誕生日に親友からもらった輝石から、羽根カエルが孵化したとき以来の衝撃だ。

「大事に守ってね。そのうち協力者が現れるとは思うけど。それまでがんばって。じゃ」

自分の役目は終わったとばかりに、女はとつと踵を返した。

ドアベルが涼やかに鳴る。その柔らかな音に、固まっていたローズはようやく我に返った。

「ちよっ！ちよっと待ってください。困ります。うちは教会みたい
に赤ちゃんを預かったりしません」

客に赤ん坊を押し付けられたなんぞと店長のバネッサに知られれば、よくて減給、最悪レオナルドに報告されて破門だ。ローズはカウンターから出て、女を追いかけようとした。

しかし、まるでそれを阻止するかのようには赤ん坊が目覚めて泣き出してしまった。

「ああどうして今起きるのよ。おとなしく寝てなさいよ！……ああ怒鳴った悪かったわ。だからどうかそんなに泣きわめかないでちょうだい」

ローズが小さく子守唄を口ずさむと、赤ん坊はぴたりと泣き止んだ。ローズは捨て子だったので魔法学校に入学するまで、教会で過ごしていた。そのとき僧侶から年下の子供の面倒を任されていたのである程度泣いている子をあやすのは慣れている。きやつきやつと機嫌よさげに笑い始めると、ローズはほつつと息を吐いた。

とりあえず、バネッサには赤ん坊のことは内緒にしておいて、店仕舞いしたらこっそり保安官に相談しようと思った。

「もうなんなの、あなたのお母さん。あんなにひどい人ね。好きであなたを生んだくせに他人に任せるなんて」

ローズはつい愚痴をこぼした。
どんな事情があるにせよ、自分が生んだ子を簡単に手放せるなんて信じられない。

自分も捨て子だったからか、どうしても子供を捨てる親にローズは厳しい目を向けてしまいがちになった。

赤ん坊は当たり前だが、自分がどういう状況にいるかわからずに、ローズをにこにこ見つめてくる。

円く白い頬がうつすらと赤く染まっただけで愛らしい。赤ん坊らしい

円く大きな瞳は、

冬にたたずむ森のような深い緑色をしていた。

「あら、あなたどこかで見たことのある顔ね」

誰だろうと考えていると、ローズはあつと小さく声をあげた。

「この子、わたしに似てる……」

そう呟いたとたん、赤ん坊の顔がぐにやりと歪んだ。

ローズは悲鳴をあげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6991c/>

魔法使いローズと吸血鬼

2010年10月28日08時47分発行